

序章 自由英作文の書き方

自由英作文といえども、書き方(書式)まで自由と言うわけではない。ちょっとした作文から論文に至るまで、英語ではすべて書き方のマニュアルが存在する。まずは英文の書式を身につけることから始めたい。

日本の国語の授業における作文は、書き方よりも内容が重視されるが、英米では書き方の指導が徹底的に行われる。文章を書くには何を書くのかが頭の中で整理されていなければならない、一文一文が有機的につながっていかなくてはならない。要するに、**論理性**だ。この処理がなければ、支離滅裂の単なる文字の羅列になってしまう。人にものを説明できるかの能力は論理性の鍛錬にかかっている。日本人と違って、幼い頃からディスカッションなどを通して、自分の考えを明確に他人に伝えることを重視する英米の教育では、この**論理的思考の養成**が最重要テーマなのだ。

私事で恐縮だが、大学時代にアメリカ人の先生の授業を受けていたことがある。成績はレポートの良し悪しで評価されたのだが、自慢ではないが内容にはかなりの自信があった。しかし、評価はABC中、2番目のBであった。先生に理由を尋ねに行くと、「君のレポートは論文の書式を守っていない」と言われた。この時、私は英語における書式の重要性を悟った。

論理的思考の養成など簡単ではないかと思われるが、長年教壇に立っている立場としては、学習者にこれを習得させることの困難さを痛感している。特に、「もののあはれ」や「主情主義」の日本語の世界で暮していると、論理的思考とは縁遠くなってしまふ。私は愛国者として、そうした日本語の曖昧な性質が大好きなのだが、学問をやる以上は論理的に物事を考えることを避けては通れない。逆に言うならば、**論理的思考の結果生じたものしか、学校や試験では評価できない**ということになる。主観的なことや感性は点数が付けられないのである。論理的なことではしか相手を説得できないのだ。デカルトが哲学を説明するのにも数学的思考を好んだ理由もそこら辺にあるのではなからうか。

したがって、まずは**書式と論理的思考**についてしっかり学んでほしい。

1. 文章構成

古代中国の漢詩のうまい書き方の典型は**起承転結**の構成になっている文であるとされる。日本語の作文もこの影響を受けてか、「起承転結のはっきりとした文を書きなさい」などと言われる。

起句：大坂本町糸屋の娘
承句：姉は十六妹(は)十四
転句：諸国大名(は)刀で斬るが
結句：糸屋の娘は眼で殺す

上記は頼山陽が引用したと言われる、起承転結の有名な例である。起句で物語の舞台や登場人物を紹介し、承句で補足説明をし、転句で話を大きく展開して盛り上げ、結句でオチを言うという構成だ。

このように、起承転結は4部構成だが、**英語の文章は3部構成が基本**である。すなわち、**序論(Introduction)・本論(Body)・結論(Conclusion)**の3つだ。この3つを念頭に置いて書くことが最低条件である。そして、このそれぞれの切れ目で段落を変えるのが読みやすい文章となる。

とは言え、50語程度しか書かない作文であるならば、1段落の内容が1行程度で終わってしまう場合もあるので、段落分けする必要はないが、それ以上(少なくとも100語程度)書くのであれば、段落分けをするべきである。ただし、段落分けをしない前者の場合でも、**序論→本論→結論の順番で書くこと**に変わりはない。

2. インデント(字下げ)

段落分けをする場合、書き出しの部分はやや空けることになっている。一般にはワープロなどで言う全角文字1文字分(=日本語の1文字分)空けることになっている。これを**インデント(字下げ)**と呼ぶ。驚いたことに、このことを知らない学習者を多数見かける。ノートや答案用紙のぴったり左端から文を書き始める人が多い。普段、英語の論文を読んでいて、インデントをしていない文を見かけることはないと思うので、そういうことは自然に身につけているはずだと思っていたが、現実にはひと言注意しないとダメらしい。日本語でも、書